

アラソン

ノルマンディー人の
プロポIII
【2014年4月号】

翻訳：高村昌憲

惑星である火星のことばかりが話題に上ります。普通の眼鏡で見ると、火星は光り輝くえんどう豆くらいの大きさでしかなく、殆ど三角形に近い一種のしみのようなものを何とか見ることが出来るだけです。しかし、最も倍率の高い望遠鏡を取り出して見ると、火星の大陸、氷の山、水路の驚異をそこに見て、更に何時までもその話題は尽きることがありません。良く晴れた夜であれば、この季節は誰でも火星を見ることが出来ます。太陽の軌道と殆ど同じ処の後を追う赤みを帯びた天体は、夜の十時にその運行が頂天に達します。

火星から遠くない処、殆ど東の方へ一時とやや北の方（一時とは頭上に広がる空の丸天井の十二分の一です。）、つまり火星よりもやや遅れて一九〇九年の秋に青味を帯びた星の一種で普通の明るさがあり、如何なる星座にも属しておらず、そして輝かしい火星の側にあつて、全く目立たない星があります。もしも十歳以下の子供が時々見るようなもので少し倍率が高く夜に見る望遠鏡を持っているなら、青味を帯びた星の方へ向けて見て下さい。断言して私は言いますが、空飛ぶブレリオの飛行機（1）と同じものをあなたは見ることでしょう。

その星は土星です。空の宝石です。あなたは底知れぬ暗黒に浮かぶ土星を見て、その天体の回りに光り輝くリングを認めるでしょう。斜めに傾いているその輪は、右側と左側の両方が繋がっていて、隙間には影があつて土星からは離れていて、端から端まで大空に浮いて光り、その足跡を描いているのがあなたには分かります。何百もの衛星によって凝結している軌道のようなものに見えます。天体とリングは、隠れて見えない太陽の炎によって輝いています。改めて良く見ると、その光は常に青味を帯びた小さな星に見え、望遠鏡に戻つて土星を確かめると、些か苦勞してでもその存在は宝石のように重要であると思ひ、大空の中で足を取られたように動けなくなります。土星とそのリングを見た日から天文学者になつたという人の話を私は聞きました。何がそんなに感動させるのでしょうか。

私は、望遠鏡の話を次に語りたと思います。或る処に城がありました。その城の上には大空が広がっています、城の中には大変に教養を積んだ人々がおりました。部屋の隅には三脚台があり、玉突き台の下に大きな箱がありました。「この箱の中は、伯父が遺産として残した望遠鏡である」と言われていました。その伯父は偉大でしたので、そのことについて少しお話します。その時代も土星が空を回っていることを人々は知っていましたが、関心を持たれなかつたのは、彼らが勉強したと思われる教養はすべて学校で教わっていたからです。

ラケットを持って遊んでばかりいた若者であつた偉大な伯父は、お金を沢山持っていたために先生の話を殆ど聞かず、世の中に出てもぶらぶらしていました。この無学な人間であつた伯父は或る日、本当の空を知り、空にあるものを見るために望遠鏡があることを知りました。彼は箱に眼を落としてその箱を開き、望遠鏡を取り出して星から星へ手当たり次第に観察して、ついに「これだ」と言いました。彼の声は少し震えていました。全てがそこに流れ込んで行くようです。この日は彼にとって重要な日になるでしょう。何故なら、習慣は事物の本当の姿を私たちから隠しているからです、土星の回りの斜めに傾いたリングを見たとき、私たちの回りや足元に存在し

ているこの素晴らしい地球を見直さなければならぬからでもあったからです。宇宙に浮かんでいる、良く知っているこの大地について考えないのはどうしてでしょうか。この地球も又、雲や大洋の海水の水分で覆われています。そして、何故そこへ眼が行かないのでしょうか。何故眼を開いて、地球上のものを良く見ないのか、と私は言いたいのです。望遠鏡の先に土星を見出すとき、人が発見するのは〈世界〉全体です。

(一九〇九年十月二五日)

(1) ブレリオの飛行機は、一九〇九年七月二五日に初めてイギリス海峡を横断したフランス人飛行士のルイス・ブレリオが、その時の単葉機をモデルにして彼が設計した飛行機のこと。

六十二 通りでの施し (AUMÔNE DANS LA RUE)

通りにいる貧しい人々に物を与えるのは多くの理由から間違っている、と情け深い人に気付かせようとしていた時、彼は次のように答えました、「あなたのお話は良く分かります。私は自分の思いやりがそんなにも先見の明がないことも良く分かっています。しかし私は、自分のことも分かっているのです。私には、もっと良いことはして上げられません。あなたは私の家計や暮らし振りをご存知です。そんなにも大金を持っていませんし、お金に困るのを心配しています。ですから自動車に乗るのは止めて、出来るだけ質素に辻馬車に乗ることにしています。浪費癖がつくと大変困ることも知っています。私よりももっとお金持ちの多くの人々が支援している慈善活動への協力をあなたがお願いしに来ても、本当を言えば、私が出さなければならない十フランにも躊躇しているのです。私は自分のことを大袈裟に言っています。慈善好きの婦人たちの財産と私のものとのを比べてみると、彼女たちは庭や自動車や宝石を持っていますが、逆に私の財布から徴収する税金は財産に比べて累進的に多いという結論を私は下します。私は働いて生活費を稼ぎ、使う物は何でもお金を支払い、他人の労働からは如何なる利益も徴収しません。でも私を慈悲深い団体に加盟させる裕福な協力者たちは、そんなことは何も言わせてくれないではないかと私は独り言を言うだけです。私の十フランは、私が望みもしない教訓的な説教に味付けがもっとされているのではないかと私は独り言を言うだけです。それというのも、何も無い人々に儉約や規律を要求することは少し酷いように思えるからです。儉約や規律を生み出すのは豊かさです。私が与えた物を自分自身に与える方がより親切になるのではないかと私は独り言を言います。結局のところ、それを言えば恐らく惨めになります。私は自分が不幸を理解する以外には哀れを感じません。こう言う訳は、ここでも十フラン、あそこでも十フランを出さないための口実かもしれません。多分そうなのです。

よろしい。ですから私は少し元気を出して貧しい者の家を探しに行き、門番に尋ね、屋根裏部屋をしらみつぶしに調べに行きましょう。でもそれをやるには私には時間がありません。もう一度言いますが、私には決まった収入がありません。もっと言いますが、というのも私はそれをやってみたのです。私は貧しい人々にとって悪い訪問者です。しかし、救済を無くす勇気もありません。何故なら、彼らが熱いコーヒーフィルターを隠す時間もなかったのを私は気付いていたからです。ですから私が裏切られるのは貧しい人々の家の中でも、通りでも同じです。もっともあなたは、かなり通い続ける慈悲深い訪問者です。

それ故に私は貧しい人々への同情によって、或る時は二スー、又或る時はそれよりも少し多く、私の哀れみに従って出会った人々に与えます。先ず、身体障害者たちへ与えます。何故なら、お金を貰うのは彼らの権利であるからです。そして彼らには礼儀正しくして与えます。一人か誰かと一緒にいる子供たちにも与えます。何故なら私が与えた二スーは額が少なくても、喧嘩になることもあり得るからです。そしてみすぼらしい乞食にも与えます。彼は質問されると、ベッドとかパンを探していると答えます。その物を本当に見付けることにはなりますが、それでも十回につき一回の割合です。以上が私の慈悲です。その金額は一年間で十フランよりは多いです。でも

、その位なら気分を苛立たせることもありませんし、お金に困ることもありません。それは偉くもないし、美しくもありません。でも、そのことで勲章の授与をお願いすることもありません。しかし、見返りが何も無くても、決して誰にも煩わされないと分かることも良しと考えて欲しいのです」。

(一九〇九年十月三十日)

六十三 道徳、それは富裕者たちのためにあるもの（LA MORALE, C' EST BON POUR LES RICHES）

道徳、それは富裕者たちのためにあるものです。私は冗談を言っているのではありません。貧乏生活は暇なしでやることばかりが多く、自由な意志も選択も熟考もないと私は理解しています。或る種の身だしなみは貧しい人々にも強制されていますが、それ以外は不可能です。それ故、慈善家が貧しい人々に与える多くの忠告が私は嫌いです。

貧乏人は良く洗濯して身を清潔にしていれば良い、と最も穏和な人々でも望んでいます。何故なら水は金が要らないからである、と彼らは言います。しかし、それは間違いです。水には苦勞させられますし、石鹼を使うにはお金もかかります。子供たちの体を洗うには時間がかかりますし、ブラウスやズボンを洗うのにも時間がなければなりません。

物事には段取りと先見の明がなければならない、と言われてしています。その通りです。それを誰が疑うのでしょうか。しかし、利益があるから徳を持つことになり、利益は最初の資本の上にはしか接木出来ません。ヒドラの頭（1）のように、生き変えてくる心配事と毎日戦っているのに、あなたはどんな思慮深さを望むのですか。先見の明には必ずしも身の安全がある訳ではないことを、あなたは知っているのでしょうか。暗黒の未来の方に向けられている視線が分かるのでしょうか。そんなものは分かりません。それは抜け出すことが出来ない循環の円です。無頓着は悲しみを養い、悲しみは無頓着を養います。

私は、幼稚園の女の先生を知っています。彼女は、小さな子供たちに一寸した道徳を心から教えようとしたが、それ等の学習の言葉は喉につかえて仕舞いました。「きれいに片付いて明るい家になると、とても嬉しいですね、皆さん」しかし、窓と言っても天窗と狭い屋根裏部屋しかない、二人の子供の視線に彼女は出会いました。

「一週間に一度は寝間着を変えましょうね」。あゝ、彼女はこの子のシャツを洗ったならば、ぼろぼろになることを良く知るようになりました。アルコール中毒は危険であり厄介なことです。彼女が酔っぱらいの肖像画を描くように話そうとしたとき、この二人の双子の父親がアルコール中毒であるのに気付きました。二人は恥ずかしくて顔が赤くなっていました。喉につかえて言いそびれた儘になって仕舞う話は、幾らでもあるのです。

どうしたら良いのでしょうか。説教は止めること^やです。洗濯をするのは、つまり汚れているからです。洋服を新しく着るのは、つまり古着になったからです。実利的に実践すること、それ自体が正しいのであり善意なのです。子供たちに恥をかかせてはなりません。子供たちの苦痛に対して不手際があってはなりません。うっかりと心にもない御世辞を言っではなりません。洋服を清潔に着て、節度ある両親がいることで多くの幸運を手に入れると言えば良いのでしょうか。いいえ、実際はもっと別のことを話す方が意味があります。世界中のことです。星々、季節、数字、大河、山のことを話し、ソックスを履いていない者でも同じ国民であると感じられること、校舎は正義の聖堂で貧しい者たちが軽蔑されない唯一の場所であるようなことです。

富裕者たちのために、そして何よりも私たち自身のために説教は別にとって置くことです。必要性以上のものを何か身に付け、少し余裕が出来るや否や、その時に自分の人生を手に入れることが出来るのです。悪い空想と戦い、トランプ遊びよりも読書が好きになり、アブサンよりもレモネードが好きになるときです。しかし、追い立てられて悩み多き人生を前に、未来は既に現在になって直ぐにやって来

ます。どうしようもないことしか人は考えなくなり、酒を飲む方が好きになり、やることが出来ても何も考えません。それ故に敢えて言わせて貰いますが、もしもそのような彼らと同じ立場になっても、あなたは同じようになりませんか。

(一九〇九年十一月十三日)

(1) ギリシャ神話の七(九)頭蛇のことで、一頭を切っても数頭が生まれるように、手が負えなくなることの譬えにも使われる。

六十四 死刑執行人にとっての亡霊 (OMBRES POUR LE BOURREAU)

今朝の新聞から、或る殺人者の死刑執行が行われたことを読みましたが、その後で石炭の火やピストルや溺れて死んだ三人又は四人の自殺者のことが載っていました。この似たような記事は偶然に違いありませんが、私は色々なことを考えました。全く人生には最高の善はないのでしょうか。全く人生には大きな困難があるばかりで、免れる人はいるのでしょうか。これらの残忍な亡霊に、私は地獄までついてついて行きたいのです。というのも、それらの亡霊が私たちから去って行き、亡霊の中に入るのは本当であるからです。少なくとも詩人たちは、それらの亡霊を素早く殺します。死とは、結局のところ深淵です。

そこにいるのは、ベッドの上で寝返りを打つ恋する男です。彼は自分のための死に少なくとも躊躇しています。他人のための死や、二人のための死にも躊躇しています。そこにいる彼は、既に人生から外れていて、亡霊の道におります。親友が話しても無駄です。話しても最早彼まで届きません。既に、この世の人ではありません。何故なら不可能なことを望んでいるからです。そこは絶望の入口です。実際には、存在するものである事物や人々への愛の力で生きる人々がおります。それは山や急流の川や海を愛するようになることです。決してあらゆる事物への愛から身を守る情熱ではありません。しかしこのあらゆる事物への愛がなければ、あなたは手当たり次第に駄目になるでしょう。叱責でさえ駄目にするでしょうし、あるいは最も小さいが虚栄心を傷付けることにもなるでしょう。それは情熱が事物から顔を背ける力になるから、というのではありません。それは情熱というものが強くなる事物から、人は顔を背ける時です。恋人たちは全てにさよならを言います。自殺するのは、二人の結婚が望まれないからです。あなたは、これらの理由では、決して彼らの暗い不安な気持ちを説明していません。そうなのです。彼らは既に、亡霊の道にいる亡霊になっていたのです。

何だか彼らは、殺人犯と大して違いがないように見えます。習慣が殺人犯であると私は言うのです。意地悪な人は幸福になれない、と良く言われます。しかし一般的には間違って理解されているのです。人を殺したから不幸になったかの如くです。寧ろ私は反対で、不幸であるから殺すのだと信じます。意地悪は、意地悪になる前から底なしに悲しいのです。この種の間人は人生を受け入れません。世界も人間も色彩も音も受け入れませんし、相手の彼女も受け入れません。この様な人間は、現実のものに反対して絶対に戦うのです。何故でしょうか。全ての喜びに毒を盛るウイルスのようなこの人間は、何なのでしょう。私には分かりません。しかし私は、自分自身を人生からはみ出させているのを見ています。要するに人生とは、人が信じられないくらいに皆に共通した善意のように見えます。人生というものは人生を愛し、そして死を押し返します。人間の死は全てが心に堪えます。そして殺人犯は或る意味では、自分自身を殺しているのです。彼は死のうとしているのです。

かくして彼が亡霊の道で、亡霊の考えに追隨するのが許される限り、私も降下しました。何故なら、そこの国は皆が亡霊であるからです。いずれにせよ或る時私には、死刑執行人は亡霊しか殺していないように見えました。

(一九〇九年十二月三日)

〈超人〉という観念は、今は殆ど一般的ですが、想像力を掻き立てます。もしも法律は、平凡な人で平等主義者で退屈な人の利益になっているとあなた方が説くなら、もしも一人ひとりの最もはっきりした義務とは、生涯を生き、全人性を発展させることであるとあなた方が説くなら、あなた方の話は大変に受けるでしょう。取分け、若者の中で最も自分に目覚めた人に話したなら、檻の中のライオンのように地団駄を踏むでしょう。それ故に、ニーチェのこの狂人には多くの弟子がいて、家庭の父親たちを少し心配させますが、間違った知識を良く見て考えるためにはプラトンの作品しかありません。私の友人たちよ、もしもあなた方がプラトンの彫像をそっくり地中から掘り出したなら、あなた方の感激はいかばかりでしょう。

全生涯に乾杯。自分自身が感じている全ての能力を発展させることです。素晴らしい計画です。困難な計画でもあります。小さな障害、つまらない法律、つまらない判事、両足で私たちをよじ登る軽率な小人たちの全てを排除しましょう。よろしい。でも、あなたは今、自由に何をやるのですか。あなた自身のもっと大きな障害に私は気付いています。管理し教育しなければならない情熱や欲望を持った民衆に気付いています。

愛は力です。渇きも力です。怒りも力です。悲しみや退屈や恐怖そのものは悪友です。しかしながら、それらと共に生きなければなりません。人間の顔をした袋の中で、あなた方は紐で括られているのです。それで如何にやるのでしょうか。あなたはあらゆる欲望に屈しないのでしょうか。あらゆる情熱を育てて、あらゆる暴行を許さないのでしょうか。少なくともあなたが陶醉したのなら、千鳥足でよろめくあなたの人生がそこにあるでしょう。立派な英雄です、勿論ですとも。

いいえ、そうではありません。私は、心の中で命令しなければなりません。これらの怪物は鎖に繋がれて、人間に成らなければなりません。百の顔を持った狂人であってはなりません。人間という動物は、非常に冷静であらねばなりません。彼は情熱を沈黙させ、肉体を眠らせ、自分自身を吟味することが出来て、自分の周りのものも調べることが出来るようにならなければなりません。金や銅の重さを量り、高利貸しの老人と同じ位に注意深く自分の財産を調べなければなりません。要するに、人生において肝心なのは〈理性〉が支配していることなのです。それは欲望や怒りを抑制することなのです。あらゆるものの夜の闇を通して、盲目の妹である〈心配〉を導くことなのです。

もしも現代の〈英雄〉が、蟻のように勤勉な人の小さな正義を無視したとしても、自分の欲望の中のあらゆる正義を無視出来ないようになり、王権の象徴である王杖を初恋や最初に訪れた恐怖に委ねないこととなります。そして反対に、そこでの彼には自分だけの力による自由意志があります。彼は自分のための法律を探しながら、私は確信するのですが、正義と節制と優しさを取り戻します。その様にして望まれた法律は、恐らく恐怖に駆られていた小人たちが大理石や青銅に刻みつけたのです。

「哲学とは何ですか。科学として違う名称はないのですか」と私は尋ねられました。ソルボンヌにいる鼠が囁くには良い質問です。その上、言葉については幾らでも議論出来ます。しかし、あらゆることに十分熟考して来たこの老人の意見は、その上で報告する必要があると私は思います。

老人は言いました、「哲学と科学は同じ対象を狙っていても、同じ結論にはなりません。学者が共有知識の蓄積を豊かにするために研究するのに対して、哲学者は自分自身を豊かにするために研究します。学者は新しい真理を求めます。求めて手に入れたものには戻りません。一番早く見付かる道を覚えて、更に前進します。というのも、やったことを何故やり直すのだろうか、と学者は自問するからです。私は、パリのリヨン駅からチベットへ出発する探検家と学者を比較します。学者はバステューユ広場について書き留めません。パリ東南郊の町シャラントン＝ル＝ボンを通ることもありません。何故なら、これらの地方は誰でも良く知っていると思っただからです。同様に、学者の名に相応しい真の探検家たちも、既に誰でも知っている知識には、旅行してもさっさと通り過ぎて、もっと遠くへ行かないと手に入らないことにしか止まっています。もしも私が誤解されるのを恐れずに言うなら、彼らは思考することなく学んでいるのです。あるいは敢えて言うなら、可能性が最も少ないことを考えて、見知らぬ地方へ行くまでになります。気取った話し方をする男たちも、野心を持った男たちも同じです。褒美をやるのは効果的で、彼らは沢山の褒美を手に入れます」。

老人は言いました、「ところで、哲学者とは何でしょうか。それは自分の指で耕す一種の狂人です。それは単独の奇妙な研究者です。際限の無い苦勞と多くの躊躇いで長年かけて発見すること、例えば地球が回っていることとか、極地では六か月間も日が沈まないこととか、ニュートンの法則で物体は引き付け合っていることとかを発見することである、と私は言いたいのです。このこだわりの人間は、まさしく新たな車輪や一輪手押し車や平方根の発見者です。彼は、古代ギリシアの数学者タレスから又やり直します。ラジウムのことが話題になると、「私はボルタの炉にいるしかない」と彼は答えて言います。それは無知で滑稽のように見えるのも事実です。しかしながら最早そうではなくて、私の考えでは、走る訓練をしに行くことなのです。それというのもトラックを回って走るとは、自分の足が速くなる以外に何の役にも立たないからです。同様に、哲学者も自分が知った沢山の知識よりも多くの知識を目指したりしません。それなのに何故沢山の知識を知っているのでしょうか。判断を養成するためなのです。人々が遙か遠くに離れた所を写真に撮るための何らかの方法を期待したなら、長い間待たされることになるでしょう。全てを議論したり思考したりする時があれば、早く前進しないからです。従って正確な精神の人は、やはり貴重な機械であり、結局のところ無線通信とかバッテリーを切る細網である、とこの様な論理家たちが気付く日までは怠け者で役立たずであると見做されている、と老人はつけ加えて言いました」。

六十七 死者たちを如何に思考すべきか (COMMENT PENSER AUX MORTS)

死者たちを思考するには墓地とかテーブルの下とか、あるいは降神術者の処を探しに行かなければならないとか、行きたいとか、そんなことは決して考えないことです。死者たちの生前の生活の徴を探す時、何時も奇跡や幻影のように、ものの道理に収まらないものとして思うようになります。つまり私たちが生きるのを支援してくれる法則から外れているのです。そこからは奇妙な結果が生まれて来ます。死者への信仰が、生きて行く信仰と反対であるのが分かります。何故なら、秩序や科学や進歩を前提としているのが生きて行く信仰ですが、死者への信仰は無秩序を前提としていて、私たちを周りから脅すのです。私に言わせれば、そこから死者を恐れることになりませんが、それは死者を正確に理解しているわけではありません。それは幻想です。それは秩序やあらゆる物事の間接関係を破り、結局は全て奇跡であるということになります。奇跡は、最も誇り高い勇気を多分粉々に砕き、そして宗教話が沢山生まれて来ます。しかし最悪なのは恐らく、この無秩序という恐怖から私たちが死者たちを恐れるようになり、死者たちがこの世に戻って来ないように、こっそりと祈るようになることです。従って、慰めになる道は閉ざされているのが分かります。

その上に夢想や幽霊やそれらの原因について沈思黙考して、私たちの考えを変えなければなりません。恐怖とその原因についても同じです。自然において規則的に相次いで起こる因果関係についても同じです。全てが科学に戻ることです。新しいカトリック要理によるものではありません。

その次には親しみをもって死者たちのことを考えなければなりません。亡霊の支配者になると、最早容易なことは何もなくなります。何故なら死は、子供たちや仕事の至る所にあるからです。もしも私たちが望むなら、それは至る所で友人になるからです。スピノザは意味深いことを言いました。それは死ではなく、生きて行く人生について考えなければならず、病気や情念や無知や奴隷のようになって死ぬことではなく、健康や英知や知識や能力をもって、生かしてくれるものの声を聞いて理解しなければならないこと、をスピノザは言いました。そして、それは何時も可能です。というのも、自分の中に喪失や死の原因しかないとするなら、それだけで最早死ぬことになるからです。

同じ様に既に死んだ者たちに、絶望とか悪徳とか病気を決して見ないことは賢明です。それも埋葬しなければなりません。最早そのことを考えてはなりません。しかし、死者たちが生きていたこと、私たちの裡で再び生き、私たちの周りにいる彼らを見付けることです。この信仰によってホメロスは再び生きます。プラトンもデカルトもゲーテもユゴーも再び生きているのです。亡霊は平静です。空腹も寒さも恐怖もありません。亡霊は人生の道に沿って続いているのが良いのです。全ては死者に起因しているのです。亡霊に好意的でなければなりません。期待したこともありませんでしたが、慰める女性であり、私たちの周りにいて生きているのです。のべつ幕なしに良く喋る人々のように天国のことを気軽に話す人々は、正しいお祈りでそれを実現させるのが大変上手です。私は正しい思想によってそれを聞いています。鍵をかけて死者たちを見張る滑稽

な牢番を考え出すことはありません。頑張りましょう。死者たちを解放しましょう。

(一九〇九年十二月二七日)

六十八 立候補者たち (CANDIDATS)

人から望まれる代議士を見付けることは、そんなにも簡単ではありません。野心家の種子は何処にもあります。バカロレアを準備するように政治家の道に進もうとする青二才は沢山あります。しかし私が言っているのは、信用出来る人間の事です。彼は、自分の人生を人間的に生活する政治、つまり買ったり、売ったり、物事に当たったり、人間を扱ったりして、あらゆる価値を評価する政治のために備えます。もしもそのような人間の翼が決して失われなかったならば、私はその思想を理解するでしょう。愛着も抱くことになるでしょう。そしてその仕事を理解した人々は、彼が一言言う前に彼の意見を十分に知るのであり、その人の人生は演説のようなものです。それ故に、約束したことを守るのを知りますし、それ以上に期待されて何時も一つの判断に目覚め、あらゆる問題を最良に解決するために彼は何時も備えます。でも、ポスターでの掲示や、本当に問題なのは誰か、を予想して備える訳にはいきません。

しかし、このような優れた資質の人間が見付かったなら、どんな権限を代議士に与えるようになるのでしょうか。お年玉を貰う子供のように、あなたは嬉しくて飛び上がろうと思いませんか。思わないでしょうね。彼自身を少しは疑います。活動や疲労や出費や無視してなおざりにした小さな悩みにも、気が重くなります。要するに、彼は祈るようになります。その時は、右派とか左派の意見を引き出して決して言おうとしてはなりません。私は、次のように言って欲しいと思います。「駄目、駄目。決まり文句は駄目です。私は急進的です、何故ならその真実は重いからである、と私は言いたいのです。しかし、何故私がそのように理解したいのかをあなたに言って、あなたは私のようになるのです。私は決して子供ではありませんから、こちらのマホメットとかあちらのマホメットのコーランに従うことはありません」。これらの話は私たちには解ります。何故ならそのノルマンディー人の頭は熱くならず冷静で、帽子を変えるように考えを変えることはないからです。

現代のこの時代に、私たちの青二才は何の仕事をしているのでしょうか。学位を取得し、お喋りの訓練をし、記憶を働かせて社会学の知識を身に付け、政治という大きな惑星の周りを回り、仕事をして働き、報告書を書き、何もかもごちゃごちゃの時に全てを調整する解決方法を見付ける訓練をします。彼は、合唱隊の子供のようになった後で、副助祭や助祭になります。彼は急進派のミサを助けます。あるいは急進社会主義者とか社会主義者のミサを助けます。彼は、直ぐにそのことを口に出して言うでしょう。彼が選んだ選挙区を講演で歩き回るのを見るのは直ぐですが、十年後には努力しても彼の話に誰も関心がないのは分かって大変にびっくりさせられます。

その時彼は良い考えが浮かんで額を叩き、つまらない政治家や有名な〈淀んで流れのない沼〉(1)を呪い、薬を探して見出しました。その薬はあなたを元気にするものです。その薬とは比例代表制と連記投票です。そして、それは大変に上手く行くと思うのでしょうか。何故なら〈党〉はそれを後援しますし、押し進めるからです。しかし私は嘗て話しましたが、あなたの独立心は〈党〉の要求に余り適合しません。〈党〉のやり方にも合わない時に、〈政治家〉にとっては

汚れのない仕事が見出せるようになるのです。あなたが〈党〉と一体になることは都合が良いに違いないでしょう。そして議会へ非常に大きな声が出る蓄音機を送り、今度はあなたが鼻にかかったような音を大会議場ですす番なのでしょう。実際に、もしも政治のほら吹きどもが比例代表制に賛成しなかったなら、それは奇跡です。

(一九〇九年十二月三十日)

(1) 一九〇九年十月十日にフランス西南部の町ペリグーで首相のブリアン(一八六二～一九三二)は郡選挙における〈淀んで流れがない幾つもの小さな沼〉状態を強く告発したが、アランは反論している。

私は、天啓宗教のキリスト教に反対する三冊の書物を読みました。最も古いのはプラトンの対話篇で『エウチプロン』の表題をもつもの、次はスピノザの『神学・政治篇』、そして最後はジャン＝ジャック・ルソーがパリの大司教に宛てた手紙です。これら三人の著者は、自分なりに各々が信心深いのですが、正すべき処では宗教を大変に強く批判しています。以下はその梗概です。

人間は各人が自分自身で判断、良識、理性あるいは自ら進んで認識する力を見出します。ところが、もしもこの世に神というものがいるとするなら、何故一人ひとりの意識の中に明白な概念として自己の存在が現れる代わりに、書物や奇跡によって、あの世よりも現世に現れることを如何に信じる事が出来るのでしょうか。どうやらありそうもないようです。何なのでしょう。聖典を読まなかった人間、長い人生の間を貴族のように考えていた人間は、やっとのことで〈文字〉をたどたどしく追って読む副助祭よりも分かっていないのでしょうか。神は、思考する人々よりも寧ろ読む人々に現れるのでしょうか。正しい神の存在を認めたなら、何故似たものを信じるのでしょうか。

もっと言います。書物とか奇跡による啓示を主張することは、少なくともあり得ない訳ではありません。でも、それは不条理です。書物とは何でしょうか。それは白いものの上にある黒いものです。奇跡とは何でしょうか。それは全ての夢と同じようにある一つの夢でしかありません。書物は読まなくてはなりません。私は、それが意味するものを理解して開きます。そして自然の判断とか、何度も言われているように内部の光によって如何に理解するかです。従ってそれを知るにしても、何時も理性によって一人ひとりとは〈神〉を知るのです。

その点について主任司教は次のように議論します。墮落した精神を持った人々がおりますが、もしも靈感を受けた人とか予言者が書物や奇跡のことを説明しても、彼らは理解するまでに至らない、と彼は言います。よろしい。でも、靈感を受けた人とか予言者は、自然の光に従って如何に自分自身を理解したのでしょうか。そして、もしもそれが本当に靈感を受けた人とか予言者であったとしても、私が自然の光によらないとするなら、それを聞く私は如何に知れば良いのでしょうか。結局のところ靈感を受けた人の言葉は何時も音だけでしかありません。私がそれを認めたとしても、私自身の裡でその意味を認めるしかありません。ジャン＝ジャック・ルソーは言いました、「何故か。神と私の間に、何故こんなにも沢山の人間がいるのは何故か」。

いずれにしても宗教を判断するのは何時も個人的意識です。人が語る事が正しく、本当に神の言葉であるのか私が知るの、何時も私の理性です。そしてプラトンによってソクラテスは、今日提示されなければならないような疑問を多く提示していました。「正義は正義である。何故なら神がそれを望んでいるからだ。あるいは寧ろ私たちが言う正義を神が命じているものと思えて来るからである、ということは決してないのだろうか」。宗教から独立した精神というものは、この素朴な疑問に要約されます。

そしてスピノザも同じです。神が出現する時は、その資格を示して、先ずそれが聖なるもので

あることを証明すべきであると分からせることです。しかし、どのようにそれを証明するのでしょうか。言葉で言うのではありません。「私は神だ」と。それなら蓄音機でさえ言うことも出来ます。しかし、聖なる英知を証明する言葉を言うのも一緒です。そして、それが人間の英知でないとするなら、どのように判断するのでしょうか。従って、神託とか、小鳥たちの飛翔とか、天の声に英知を探しても何も手に入りません。それが見付けられたとしても、何時も一人ひとりの心の裡です。問題点はそこです。それ故にあなたがシヨン運動家とか誠実な教皇制礼賛者と議論したいなら、私が話した三冊の本のうち一冊は、あなたが質問と関係ない方へ行かないためにも、ポケットに入れて置くべきです。

(一九一〇年一月三日)

七十 権利と公平の観念 (LE DROIT ET LE JUSTE : IDÉES)

私は見知らぬ人にコローの複製画を売りました。彼はそれを本物と思って、コローの本物の絵の値段で買いました。この取引は少しも公平ではありません。でもその時、私は支払われた値段が公平でないと理解していませんでした。何故なら、公平な値段を計算するのは誰でしょうか。それに、もしも私自身も知らずに、もしもそれが複製画であると思っても本物のコローの絵を売っていたなら、その取引はそれでも不公平なのでしょうか。それでは不平等です。もしもその絵を売った私が自分自身で売る物を良く知っていて、自分と彼とでお互いに平等を確立したなら、その取引が公平なのは確かでしょう。

それは全ての人に馴染みの概念です。彼らはそれを認めますし、考える度に納得し歓迎していると私は言いたいのです。しかし、彼らは普段から考えませんし、そんなにも長く考えません。非常に早く元に戻ります。それは沢山の事例が理解させてくれます。全ての取引が公平に行われることは少しもなく、何時も力関係によって決められています。値段についての議論は戦争のようです。誰もが相手を騙そうとします。例えば売手は最高額で売りつけようとしています。買手はその物に関心がない様子を示します。それらはフェンシングのような交わり方です。見せかけのフェイントです。巧妙さが最も発揮されます。勿論、それは何時も戦争であり、征服でしかありません。

しかしながらこの大戦闘の後に、私が死骸の中で公平さを探しても無駄です。〈力〉は〈力〉にしかなりません。〈権利〉は決して勝利しません。〈権利〉では少しも取引が達成されません。何時も、百回とか千回もの不公平な取引が行われた後で、公平になるのです。あなたは正しい者を殺します。彼が正しかったことは真実の儘止まります。力は、この地上に不公平な給料を齎します。もっと適切に言うなら力は、不公平な給料が公平であると言われるまでにサラリーマンたちを愚かにします。しかし不公平な給料は、少しも公平な給料にはなりません。

命令や銃剣で、円周と直径の関係を変えるとか、五十年間に利子が三パーセントの年賦金の償還を変えるのを望む専制君主は笑われ馬鹿にされます。もしもこれらのことを変えたいのなら、銃剣でない他のものでやらなければなりません。計算して検算しなければなりません。それには歯も拳骨も足もありません。あるのは専制君主から逃れた物事の秩序だけです。

権利や公平は、この秩序に属しています。もしも私が公平と見做したものを公平でないと証明したいなら、あなたが気に入っているとしても決して大砲や胸甲騎兵を持って来てはいけません。決していけません。武器には正しい理性があります。力に反対する力です。理性に反対する理性です。権利には力がありません。そのことを私は良く知っています。勿論、権利が弱い処から撃ってはなりません。

古代ローマの将軍ルキリウスには千人の奴隷がおりました。そのことが本当だったのかどうかを知るために、私はルキリウスが丈夫な鞭を持っていたかどうかを探求する必要はありません。鞭は証拠になりません。その点についてルソーが『社会契約論』の中で言ったのは正しいことでした。泥棒が持っているピストルは、あなたの財産について如何なる権利も与えません。

もしもあなたが『社会契約論』の本を燃やして無視するなら、議論をしても意味がありません。
アルキメデスを殺した兵士は、幾何学まで殺したのではありません。

(一九一〇年一月十一日)

(次章へ続く)

七十一 税は決して所得に課せられない (L'IMPÔT NE FRAPPE JAMAIS LE REVENU)

最近税についての議論が数多く行われております(1)。それは主として誰が納める税か、誰が納めるべき税かを知るためです。私は先日或る大胆な民主主義者が言うのを聞きました。「金持ちは既成事実と向き合っていなければならない。何故なら、資金の海外流出の脅威は脅しそのものであり、全く単純に分かることであるからだ」。私はそのことを聞いて、その考えに賛成しましたが、その考え方には大変に大きな逆説があります。そのことをあなたに話してから二年か三年になると思います。

新しい税は瞬く間に全ての地主たちを貧しくします。こうした訳で最早、誰かを侵害します。以下はその理由です。畑は正味の収入を示しています。その畑の納付税は、耕作費用を計算に入れます。もしもその畑を売却するなら、売値は正味の収入として計算されます。家についても同じことが言えます。それ故に、もしも私の畑や家の税が増えれば、正味の収入が減ります。その結果として、それが畑や家の市場価格になります。それ故に、それは恰も私が一部を奪い取っているかのようになります。しかし、他人の手によって交換されながらも、この財産は引き継がれて行きます。買い手は新しい税を計算して正味の収入によって値段を決めます。新しい税がなかったなら、畑や家はもっと安くなったでしょう。従って、それは貨幣と見做すでしょう。その次には、新しい税は最早誰かが納めるようになるでしょう。全ては、恰も国家は公物で成り立っていたかの如く行われ、税を徴収します。でも、この公物によって値を下げた所有地を買う人々は、所有する土地が全て高くなっても、如何なる税も納めないでしょう。

少なくとも新しい所有者は、この国家財産の管理人を探します。例えば、もしも国家が私の畑の二〇分の一を没収したとしても、それでも耕作する所は一杯あるでしょうし、しかも自腹です。例えば国家は、収入を生む私のこの二〇分の一の畑を耕して種を蒔くのに必要なものまでは与えないでしょう。正味の収入に従って購買価格が決定されていたのに、これらの耕作の費用は予想されている、とつけ加えて言うのは本当です。土地所有者は、この様な次第で一銭も支払いません。しかし、少なくとも管理人に労働代金は与えます。

更に、この二〇分の一の畑も、収穫を齎すように実がなるためには労働しなければなりません。その生産物は国家が徴収します。そこから同じ手作業の労働が先ず、それを生産した労働者へ分配された財産になりますが少なく、この労働の給料は減額される結果になると言えます。

もしも収入についての新しい税がそのようなものであったなら、私は二つのことをはっきりと区別します。思い出の品物の没収は直ぐに人を傷付けます。その後、管理人と労働者の労働についての税です。でも所得は、所謂給料と異なる限り把握出来ません。このことは考えてみるべきことです。

(一九一〇年一月二八日)

(1) 新しい税金は、累進税が一八八〇年以来、急進派たちから求められていた。一九〇九年に下院では可決されたが、上院で可決されたのは一九一四年であった。

七十二 洪水罹災者の救済 (SECOURS AUX INONDÉS)

洪水罹災者のための募金が集められています。彼らのために踊りにも行きます。慈善目的と見做したい催しのことを話すのは止めましょう。あらゆる概念の混乱は、きれいな店を忘れるのを望まないで快樂に耽る破廉恥な人々に反対するが如く、腹を立てるまでもない滑稽な側面にあります。しかし、募金や盲目的な友愛活動について考えなければなりません。

洪水は単に、倉庫や家を水浸しにされた人々と関係があるわけではありません。今では事件になっているのです。二人の管理人がガス灯で殺されました。水が地滑りを起こし、ガスを送るパイプをねじ曲げて折ったのです。そこから流しの穴や溝を通して、ガスが忍び込んで来ます。近頃はこの種のことが多く起きています。その結果に私たちは我慢します。それ故に、そこから成長して寛大であってもなくても、可能であるなら元の状態に戻りたいと思うようになります。この様にして私たちは、倉庫を石炭商に返します。パン焼き室をパン屋に返し、市内電車の工場を運転手に返します。そうでなければいけません。道具は壊れます。何故なら家も地下室も工場も鉄道線路も、これらはいずれも道具であるからです。客が道具の代金を支払うのは当然のことです。私がパンの代金を支払う時は、犁や鉄道線路やオーブンや薪の倉庫や製粉所の代金の一部を支払っているのです。もしも何らかの思いがけない理由で、それらの道具が摩滅する前に壊されたなら、生産品の価格も違って来ます。私が支払わなければならない代金も違って来ることになります。その上、直ぐに支払わなければならない、通常の生産品の価格に戻るために、貯えについては直ぐに用意しなければならなくなります。貯える限り、消費者というものは洪水に遭った生産者に、いずれにせよ代金を前払いしなければなりません。

この経済的均衡を回復させるために感情を当てにする時、私たちはあらゆる観念をごちゃ混ぜにしていると言えます。ここでは、苦しんでいる人々を親切心から助けることは決して重要ではありません。そうではないのです。寄付して貢献することが重要であり、一人ひとりがそれなりにやり、皆で救済することです。そして、それは自然であり、自分のやり方でやるのです。というのもそれらの貯えがどんなであろうと、私たちはそれらが経済的秩序になって、災害が破壊して行った生産活動の歯車になるからです。

それ故に、実際には余分なものから天引きする税金が重要です。国家は直ぐに必要性の高いことを行うことです。損害が大きいと算定したなら、その報告を私たちに行うことです。例えば課税の査定額は各県で重くなり、合計額は相当の額の金額になるでしょう。半分とか三分の二の課税額を軽減して少なくすることにもなるでしょう。直接洪水に遭った人々を全額免税にすることもあるでしょう。誰もが収税吏の処へ行きます。そのことが合理的であり正しくもあります。さもなければ、私たちは不正の上に不正を積み重ねます。上院の議員たちは全員が百フランを出すと発表するのでしょうか。何故、この貢献は平等なののでしょうか。偉大な国民がやるべき方法を見出した結果がこれなののでしょうか。

(一九一〇年一月三十日)

七十三 同情に反して (CONTRE LA PITIÉ)

十年程前に、理工科学学校卒業生で川や運河の技術者主任をしていたタティヨン・ド・ラ・ニゴティエールは書類にサインするのに忙しかったのです。骨の折れる仕事でした。彼の事務所には、五十件以上の報告書で一杯でした。彼はそれらを一件ずつ疑問を持ち検討していました。それというのも報告書というものには、不注意な管理者には罫が仕掛けられているからです。役所の事務所という処は理屈が好きです。規則を曲解した話とか、検印を忘れた話がどれ程沢山あることでしょう。タティヨン・ド・ラ・ニゴティエールも又、煙草を吸いながら少し動きを止めて、古くからの同僚に言うのでした。「これは重大だよ、君。これは大変に重大だ。私は何キロメートルもの土手を監視しなければならないから、全て知っていなければならないし、全てに眼を配っていなければならない。もし私の部下が怠慢だったり何も知らなかったなら、悪いのは私だ。私の責任は重い」。

同僚は「その通りだ。でも、そんな風に考えるのは誰だろうか。その取り扱いは理解されているよ。サインの数を数えれば、誰も心配しなくなるだろうよ。しかし、あなたは水を支配している。水のように危険である、と諺にも良く言うではないか」と言いました。

タティヨン・ド・ラ・ニゴティエールは言いました、「水はそんなにも危険ではない。危険なのは規則である。河が氾濫する時、当然だが私は何も出来ない。でも、予想するばかりでもない。水路測量士の業務が関係して来る。少なくとも改修する時が来たなら、部局では訳の分からない議論が行われる。そして時々、権限を持った部局全てを通して見積りを行うために、私たちは大変な苦勞をする」。

彼はつけ加えて言いました、「おや、そこにある書類は私が間違いを正したものだ。上辺の間違いが問題だ。何本もの排出トンネルによって水辺のトンネルの安全を凶るオルレアンの会社に許可を与えるのが問題である。このことはあなたには何も言っていない。しかし河岸や欄干についての規則を良く知ることだ。それは私が思うに、カペー朝まで遡り、調査や関係機関の許可なくして、どんなに小さな割れ目も作ってはいけないのである。水路測量には五回も私は書類を直した。一部が欠けていたり、その他の処も欠けていたりした。排出トンネルの形状や最長労働時間が議論された。結局のところ全てが規則で決められていて、そして私はサインした」。彼は丹念にこせこせとサインしました。その後、彼と同僚は水辺を散歩しました。橋のアーチの処で、印と日付を見ましたが、それは昔の最高水位を示したものでした。

同僚は言いました、「セーヌ川がこの印の処まで増水する日がこれからあるなら、オルレアンの会社は排水トンネルを閉めるだろう、と私は思う」。

タティヨン・ド・ラ・ニゴティエールは、晴れ晴れとした顔をして言いました、「しかし私が、もしも今日も用心していなかったなら、その日が何時か検討して下さい。その時は物凄い音を立てているでしょうし、サインのことは忘れているでしょう。しかし私は管理者になって三十年です。私は平静です。規則に沿ってサインすることが全てなのです」。

(一九一〇年二月三日)

七十四 比例代表制は何故好かれるのか (LA R.P. POURQUOI ELLE PLAÎT)

比例代表制の問題は、結局のところ私が何をやって貰いたいのかを望んだ時に提出されます。私は『真実連合』にて行われた議論の報告書を読みました。それは政党、政党組織、政党による暴政のみが問題にされていました。そして、この主題についての今回の議論は大変活発に行われています。

もしも有権者が、少なくとも比例代表制の仕組みを理解した後に歓呼して迎え、この種の議論が続けられて、彼らが理解した熱烈な宣教によって考えることも与えられなかったならば、彼らの結論は確かに早急に決定されることになるのでしょうか、この制度は彼らが信じた程に、そんなに明白に良いものではありません。

もしも比例代表制が挑発したこの熱狂の原因を探したなら、こう言って良ければ、大変に一般的な物の見方の結果を斟酌せざるを得ないでしょう。それは提出された制度を理解するために、批判精神としての注意力を働かせねばならないということです。それが外見上は難しい制度であっても、有利な状況を生み、念入りに検討するや否や大変にはつきりとして来ます。聴衆は、三種類か四種類のリストのこと、「複数党候補者連記法」のこと、「累積式投票」又は最終予測のことばかりを考えています。もしも説明が上手く行ったなら、少しずつ引きずられて最後には生き生きとした党が輝いているように感じます。精神のこの活動は入党する価値を認めます。彼らの心の裡では、観念が極端に混乱した結果にならないと、疑問を持ちません。トランプ・ゲームのホイストとかブリッジのようなものを少しやれば、同じように好きになるのではないのでしょうか。

その制度を述べるのであるなら、述べるにつれて次第に良く理解され、もっと明白になるでしょう。選挙に勝った現職の者はその制度が好きです。その熱狂は結局のところ話をする者が証としては最も強くなります。感染するのも同じです。私が見る処では、世論の運動になる主な原因はその様なものです。その上、彼は人が言う程に豊かでもなければ深くもありません。

私はこの点に関して、一つのことしか望むことが出来ません。それはゲームにして遊ぶことです。その経験をするには、あらゆる少人数の集会において、全ての人々と可能な限りの手段を使って、打ち解けるまで楽しむことであると私は理解しています。私たちがそこにいたならば、それらの結果を検証するためには、その制度から顔を背けることになります。そして有権者は、政党の対立を政策的に把握した後で、本当の疑問である次の様な質問をすることになるでしょう。「私とは如何なる政党なのだろうか。私は一つの政党なのだろうか」。

(一九一〇年二月四日)

七十五 お金持ちの慈善を拒んで (CONTRE LES RICHES CHARITABLES)

デザートの間でした。全員がお互いに食事で和やかになったと感じていました。和解の話はそれからです。共通の不幸は、貧乏人とお金持ちを近づけたと言われています。お金持ちの彼らは、必要性が重要であると感じていました。貧乏人は貧乏人で、貯めた財産は皆が手に入れることが出来た光の当たらない暗い場所で貯えたものでしかないと理解しているに違いありませんでした。結局のところ、政治的論争や階級闘争は、今では大変に遠い世界のものになりました。清められたこの水は漂流して行き、そして恐らくそれが大変に具合が悪かったのですが、沢山の財産を荒廃させました。しかし、そこでの社会的関係はその後更に緊密になり、より雄々しく友愛とより良い精神の目覚めが生まれました。

全てそれははっきりしているようだったと言えます。その様に理解するのが有利だったようです。しかし、何者かが平和を遠ざけたのです。それは一人のお金持ちではありませんでした。彼は立場上、お金持ちと貧乏人を決定する人になったのです。でも、彼は貧乏に生まれました。まさしくそのことを忘れて仕舞う程のお金持ちではありませんでした。恐らく彼も又、欲望がないことはありませんでした。それというのも、〈正義〉には情熱がない訳ではないからです。彼の話が凡そどんなものであったのかは次のとおりです。

彼は言いました、「少なくとも、与えることと同じ位に貰うことも嬉しいという気持ちを、あなたは皆に話します。与える人は与えることが嬉しいに違いなかったことを私は強く望みます。何故ならその時の彼は、自分自身の行為における力を考えるからです。しかし同じことが原因で侮辱にもなります。嫌な思いをすることにもなります。何故ならその時彼は、自分の弱さや自分だけの奴隷状態のことを熟考するからです。大変自然なこの感情は、最初のうちは暖かく感じたり、食べる楽しみによって隠されています。しかし貧乏人が何らかの能力をつけて考える力を持つと、怒りが心の中に湧き上がって来ます。彼が建てた小さな家の小さな庭に自分自身で通路を造って這入る時は、その不平等を我慢し、寧ろ忘れて仕舞います。それというのも人間は、何よりも自由を愛しているからです。しかし、全てのものが水深二メートルの見えない処で腐っているものですから、不平等に忍従します。不平等は足元まで来ています。登って来て、怒りを掻き立てて、運ばれて行きます。最早、お金持ちの財産の上に漂う落ちぶれ果てた人間しかおりません。更にその上彼は、疲労困憊して空腹と寒さの中にあつた子供の時に戻った友人たちの声を聞きます。彼らは感謝の涙を流しながら、お金持ちに両手を差し出しています。従って、お金のこの力は心をも屈服させています。従って暗い時代のお金持ちの意志には、栄光が与えられて喝采されます。しかし、それよりも悪いことは、父や母がそれを喜ぶことです。大災害が王位まで不当に決められて行きますが、崇められることがあってはならないことだったのです。皆さん、国民が思っていることはそのことです。そして、もしもそのことを言わないなら、私が言います」。そのデザートは苦い味がしていました。

(一九一〇年二月七日)

七十六 彗星 (LES COMÈTES)

私たちは彗星の中にいます(1)。そして観察者の計算が正しければ、直ぐに一つの彗星に接することが出来るようになるでしょう。しかし、それは稀有な状況です。セーヌ川は、通りの溝のように流れは気まぐれです。従って、セーヌ川が通りを逆流して上流へ登って行き欄干の高さになるのを一度見た人々は、月曜日に水嵩の上昇が何処で止まるのか最早分かりません(2)。そこには洪水とは別の、もう一つの稀有な状況があります。これら二つの現象は注目すべきものです。もしもこれらを何度も一緒に考えるならば、萎れた花束が恋人の想像力の中で愛されている女性のイメージと結びつくように、私たちの想像力の中で今後はそれら二つの現象が結びつくのは避けられません。生き生きとした感情がそれらのイメージを、恰も血液のより速い流れや神経のより強い衝撃によるかの如くに、しっかりと結びつけるので、私たちは脳の中に一つの思い出と、もう一つの別の思い出の間にトンネルを掘るのです。恋する男は、容易に花束からその婦人へイメージが移ります。何故なら彼の人生は、大きな望みを抱いた日のことを一緒に理解したからです。同様に水害罹災者は、辺り一面の水と彗星を同時に考えることが出来ました。或る日、彼の人生は或る恐怖によって刺激を受けました。そうして信仰に結びついて行きます。恐らく、もしもその彗星が眼に見えていたとするなら、更に酷い損害を与えた水が悲劇の夜に鏡のように、炎のような彗星の尾を二重に映していたなら、その信仰はもっと強いものになっていたでしょう。この場合、被災者の脳には洪水と彗星は、切っても切れない関係が生まれていたのだと私は思います。そこからは動物的な思いが生まれます。殆ど治す薬がない恐怖です。その後、洪水のない時の彗星や、彗星のない時の洪水を何度も見なければならぬとしても、それはこれら二つのイメージを別々に考えることが出来た以前の事です。二つのうち一つを見ると、最早もう一つの方を待ってはいない以前の事です。

これらの間違いは、寧ろ混乱した思考と言うべきでしょうが、これらが二重になればなる程、大空の新しい天体が如何にして町の通りにある水の層を広げて行くことになるのか全く分かっておりません。それによって、手当たり次第のものをめちやくちやに結びつけて、幼年時代に戻りもします。前兆に身を委ねます。神が戻って来ます。

天体と洪水の結合が説明された時は、気を付けて下さい。どんなに説明されても、知識もなく真実と見做しても、迷信や無知でない訳はないのです。常識という健全性は、生じていること全てを説明しようと努めることが前提になります。迷信との関係を弱めるには最早、迷信を言うてはなりません。それ故に彗星が私たちに投げかける放射線は、実験室で水蒸気が液化するのと同じ自然現象である、と理性的に考えた天文学者の本を私は喜んで読みました。大気の液化とは雨です。雨は洪水になります。それは健全な仮説を生みます。何故なら知性的であるからです。それ故に人間というものは、仮説の創造を形づくらなければなりません。科学を常識の伝言と見做したなら、教育は今のものと全く別のものになるでしょう。

(一九一〇年二月十三日)

(1) ハレー彗星には人々が大変に興味を持っていた。七十六年かかって地球に接近して見る事が出来るが、一九一〇年五月十八日から十九日にかけての夜には太陽の前を通過するとのことであった。

(2) 一九一〇年一月二十日以後に豪雨を伴った嵐がフランスを襲い、多くの地方が洪水になった。パリとその周辺地域は、一六五八年以来の大災害であった。セヌ川は、パリのサン・ルイ島に架かるトゥールネル橋の八メートル五〇センチメートルまでに達した。交通機関の混乱は深刻であった。ブルボン宮の下院にはボートで行った。家々は水に浸り、下水は切断し、水もガスも不通になった。水嵩の減少はゆっくりしていて、一月末日にならないと始まらなかったが、二月には再び五メートル以上になった。

七十七 吟味された予言 (PRÉDICTIONS VÉRIFIÉES)

あの頃、私は狩をしていました。私がいた家の夫人が、夕食の時に私に言いました、「あなた今日、まるまる太った鳥を撃ちに行くのを、昨夜私は眠りながら夢に見ました。鳥がくるくる回って落ちて行くのを見ました。撃った鳥をあなたの処へ持って行くのは私です。というのも、そこに私がいるからです」。皆が笑い出しました。でも、もう私はそのことを考えませんでした。少し雨が降っていました。私は仲間と一緒に出発しました。一発も撃つことがない非常に長い散歩でした。私たちは家に戻って、たつぷりと二十分経って狩をする気が全然なくなった時、大空の遙か上空に渡り鳥の群がやって来ました。私は、小さな土手の傍にしゃがみました。私は先頭の群を狙います。私の銃で飛んでいる鳥を狙いました。銃の照星の先に、鳥の嘴が見えます。その瞬間、私はこれから起きることを考えます。この動物の運命が、そこで最期になるのを感じます。私は撃ちます。鳥はくるくる回って落ちます。そして野原の向こうから走って来る女性予言者を見ます。

これらの出会いはメドゥサの頭です。観念を石に変えて仕舞います。私は、この話を何度もしましたが、何時も同じ話し方になります。私はそこに閉じ込められた儘になったようにしていました。それは他に幾つも掟のある小さな世界でした。宗教のように定められ、寺院に閉じ込められたようにしていました。私は塔を造りましたが、そこには這入りませんでした。〈タブー〉の始まりは、観念の中にあつたのであり、事物の中にある以前です。そして私は、雷によってガラス化された砂のような思い出に対して、如何にして熟考の最高点が無駄に使われるのか、それをこの事例によって理解します。私は最早、そのことを話すのが好きではありません。それが薬になるとしても、驚きは良いことではありません。

間違いから免れるためには、他の真実を思考しなければなりません。如何にして真実がしみ込むのか、人は何も知りません。兎に角、私の小さな寺院が廃墟に化すのは事実です。私は長時間考えたので、改めて昨日気付きました。女性予言者が、予言は本当に当たるか否かを知るために、狩人に或る道を取らせたのは自然のように見えます。彼女がその道を来たのも自然です。私たちが通常の道に戻るのも自然です。予言は、私に与えられた自信によって私の腕や視線を確信することが出来たように、私が狙った瞬間に私に戻って来ると今は思えます。私はもう渡り鳥しか見ません。予言が当たることには興味がありませんでした。しかし出会いがあつたこの場所は、渡り鳥の道になっているのです。私は屢々そのことには気付いていました。

これらの回り道によって、私は神聖な城壁の中に這入りました。私は、気になっていた或る種の恐怖から解放されているのを感じました。だがそれは、予言が行われる時、それを確認するようになる出来事の原因が既にあるのを理解するのは、そんなにも難しいことではありませんでした。そして何度もこの考えを、私は他の予感にも応用することを知りました。それ故に、考えを麻痺させて無力化させたのは、驚きであると信じるべきです。出来事の最も大きな多様性と理解出来る奇跡を予め思考しながら、精神を穏やかにする薬なら、私は何でも認めます。出来事によって学ぶ者は、間違つて学びます。先ずは歩き回らなければなりません。出来る限り、確認

する前に思考しなければなりません。というのもいったん予期せぬ出来事が起きると、唯一そのことによって行動するのは予期せぬことになるからです。何も否定しないことです。全てを説明することです。一つの事実が私たちの思考に反対すればする程、噛み付き、痕跡を留めます。司祭はそのことを良く知っていますが、哲学者はそのことには余りに無知です。

(一九一〇年二月二二日)

七十八 雄鶏とレトリック (LE COQ ET LA RHÉTORIQUE)

家禽飼育場の雄鶏は、沢山のイメージを生んでくれます。老人たちは、鶏の鳴き声はライオンを怖がらせると言っていました。その由来は、ライオン狩りによって齎されたヌミディア人の伝説に違いありませんでした。雄鶏が鳴くと、ライオンは逃げて行きます。少なくともライオンが逃げて行くのは日中です。私がこのイメージの真偽を考えるなら、間違いを訂正するしかありません。誰でもそうですが、夜が去れば、恐怖も去ります。雄鶏の鳴き声は、私たちには何でもありません。私たちの周りで踊っている恐怖でしかない死の舞踏は、雄鶏の朝の第一声で消えて行きます。従って最初は、雄鶏とライオンの空想上の対立でしかなかったものが、私が考えて行くにつれて、より人間的で感動的なものになって行きます。そして、その本当の関係はより符合したものになって、大変私の心を動かします。演説家は他者によってイメージを呼び覚まします。しかし、詩人は真実の関係を把握します。

一日目の朝に、平原に面した窓を開ける者は、あらゆる物事を正確に把握するために、眠りに就いて準備します。というのも夜は、両眼と両耳そして体全体に沢山の跡が残っているからです。眠りは、日中に知覚した人を目の中に登録します。夜というものは私自身よりも多くのものがあります。朝は全てがより真実のものになります。記憶にないこの光を把握することです。そしてその光そのものしか表れません。それと共に細かい歌声に続くことです。不純物を除いた光と同じものであり、光線のようにあちらこちらにはね返ります。各々の事物からその時に思考するのは、その位置です。知覚することとは出発することです。この短い瞬間に、人生の本当の味を味わうのです。演説家はこのことを漠然と感じ、あれこれ比較します。本当の詩人は同じことをじっくり考えているように見えます。彼は比較しないで、結びつけます。出来得るならば、正確に言えるまでです。朝と雄鶏の鳴き声とは、朝と雄鶏の鳴き声です。全く文字ではない訳ではありません。というのも神であるからです。しかしその言葉を事物にぴったりと合わせるの、意味のためであり、音声のためです。ヴィクトル・ユゴーはその様にして何度も事物と時間を決定して把握しましたが、何時もではありません。彼は比較と対立によって仕事をしている、と私は殆ど何時も感じます。それ故に私は彼に良く従いたいのです。しかし、その光そのものに向かって回転するレトリックを私は憎みます。

ここに一羽の雄鶏がいます。私は今、その色、形、歩き振りを近くで見ます。空威張りする人、恋する人、地方総督と比べます。それは真実を映す影でしかありません。雄鶏は雄鶏です。或る事物がそれに似た別の事物を望むのはレトリックです。私は、血液で一杯の鶏冠に、愛や怒りを見なければなりません。雄鶏自身で力を入れて固くなって締め付けてしゃがれた叫び声に、情熱的発作、理念のない生き方、その他の沢山の真実の関係が、この雄鶏によって示されるのを私は理解しなければなりません。でも、その雄鶏は藁の中でひっかいているのです。表現するためのあらゆる能力は、あるが儘のものを齎します。詩は全てが真実です。

(一九一〇年三月三日)

七十九 ガリレイ (GALILÉE)

十七世紀初めに、ガリレオ・ガリレイが地球は回っていると教えるのに不安であったことは、誰もが知っています。そのことはモーゼの後継者ヨシヨアが、聖なる書物によれば、太陽の動きを止めたという話とうまく折り合いが付きません。止めたのは地球でもありません。この教会の愚鈍化された思考をどんなに小さいことでも私は抱くのを断念しました。古い時代の言葉を新しい言い方で一致させようとしても、私には無理なことでした。例の神父たちはもっと巧妙です。要するに神父は誰もが、上着を脱いだ高貴なガリレイが手に大蠟燭を持って祭壇の正面で、地球は回っていないと表明していることを想像します。そのことは物議を醸しました。そして何年後にデカルトは『宇宙論』を、平穩を守るために出版するのを止めました。これらのことは殆ど信じられないことです。

その上、私は熟考した時、そして現在の話す自由や書く自由を素晴らしいと思う時、何時も立派でないとは評価しないのですが私はガリレイの意外な出来事を別の観点で認めるようになりました。「それでも地球は回っている」。これはガリレイが実験した後で、もぐもぐと言った言葉です。それは諺になりました。私はそこに、〈精神〉から〈力〉までの応答を見ました。馬鹿者たちは皆、言うなれば回っている地球を止められませんでした。

しかし、その上で私は次の質問を提示しました。「地球が回っていることを誰が知っているのだろうか」。回っていることは確かであろうか。私たちは皆、ガリレイと同じだろうか。地球は回っていると何度も言う人々のうち、少なくとも星々の動きを観察したのは誰でしょうか。私は宇宙形態説を習いましたが、星々が昇り沈んで行くのを見るよりも前に、バカロレワ合格者でした。勿論、それで全てが分かっているわけではありません。不規則な大きさの円を描いて、常に眼に見える星々があり、その中の一つは北極星と呼ばれていて、全く動かないものもあります。私が直接科学や実科学からこれらのことを知った時でも、地球が回っているのを知っているとは、なお言えませんでした。少なくとも直接科学によって、私は地球が回っていることを知ったのでしょうか。そして地球が丸いことを私が知ったなら、地球が回っていることを証明するために、如何なる理由が与えられるのでしょうか。何故なら、疑問に符合した多くの考察の上に築かれた精神の見方がそこにあるからです。それは太陽系を考える上で注目すべき簡素さを生んでいきます。惑星の運行もそこでは考慮に入れるべきです。要するに一つの事の中には、沢山の知識を結びつけてあらゆることを思考しなければなりません。それが地球は回っていることを実際に知ることであります。

ところでガリレイには、特権が決して与えられていませんでした。彼は、地球が回っているのを決して見ていませんでした。天空の運動を全て思考して、地球が回っていると考えるに至りました。これらの確信は、平穩に思考する中で生まれます。一つの衝撃は、それを粉々にして仕舞います。それ故に、高貴なガリレイが心配していたことを思い描きなさい。その日以来、星々のことから遠く離れて判断するには両手を使わなければなりません。英雄たちでさえ、大変に自然なこの恐怖は、動物のような生活に戻します。それはジャンヌ・ダルクに次のように言わせま

した、「燃え盛る火に一回焼かれるよりも、百回首を切られる方が良い」。焼かれることの危険を考えるなら、そして残虐なイメージで幼年時代に戻る危険を考えるなら、それでも太陽を見てそれらのことを大空に描けるでしょうか。同様に、脅かしは証拠に値するものです。激しい恐怖を持った肉体の反乱の中では、熟考することの宝を全て失うと私は十分に信じます。恐らく、その時に地球が回っていることを疑うことになったのです。以上のように、死刑執行人と首に巻かれるロープが許されるのです。従って、物事を良く理解させるのは内部の叫びです。「それでも地球は回っている」は、より人間的な良心のものです。辛うじて危険を脱して証拠を見出したのです。そのことは〈力〉が思想そのものに達しているのを理解させています。私たちに言べき力を持っている主任司祭は、私たちを信じさせる力とは無縁でないのを理解させています。肉体と結びつく者にも、良心は持っているのです。

(一九一〇年三月四日)

八十 天文学の授業 (LEÇONS D'ASTRONOMIE)

私は、十二歳の少女の関心を天文学へ向けようとした時、思いがけない障害に出会いました。私が「どうして太陽は殆ど何時も朝から晩まで回っているのだろうか」と彼女に尋ねると、彼女は先ず賢い動物の動きをしました。眼を窓の方へ向けました。太陽はそこになく、彼女は太陽の進路を教えるために振り返り、手を動かして線を描きました。でも、直ぐに笑い出し、自分を馬鹿にしたように「私は本当に馬鹿ね。太陽は回っていないのよ。回っているのは地球よ」と彼女は言いました。そこに僅かばかりの好奇心が加わるなら、私は無知とは違うものを大変に強く感じます。しかし、その知識に反対して私はどうしろと言うのでしょうか。

私が読んだ天文学の本、特に二十スーでセーヌ河岸で購入したハーシェル⁽¹⁾の本を読んで、作者が慎重に自分の思考に行き着くのを私は何時も感嘆しました。彼は最初に表面上の外見を書きます。つまり北極星の周りの部分の全ての大空の動きです。何故この動きを正確に書くようになるのかを彼は説明しています。次に先ず四季を生む太陽そのものの動きを、全体の動きから別々に離します。何故なら太陽が冬よりも夏の方が高くなり、星座の進行も一日の太陽の進行に沿って進むのが分かるからです。たとえあなたが太陽の進行を観察したいとしても、良い天気の方が良いでしょう。夜の十時頃にはまだオリオン座が簡単に見付かります。その長方形の一辺は斜めの線になっていて、その中央には三つ星が固まっています。西の空の方へ傾いて、だんだんと南の空の方へ行くオリオン座が見えます。何日か後で、同時刻に探してご覧下さい。もう見えません。この観察を一年間続けてご覧下さい。来年の三月には、同じ時刻、同じ場所にオリオン座が見付かります。もしも私が、それは地球が太陽の周りを回っている証拠であるとあなたに今から言うとしても、もっと早く何度でも言うでしょう。先ずは確認して下さい。太陽は後ずさりして大空を一周するのに一年かかるという、既に余りに複雑なこの概念を理解するまでになって下さい。

その後で、私たちは惑星たちのことを考えるようになります。それらはさ迷う天体です。月は一か月に何回も場所と形を変えて行きます。これらの外観が良く分かるようになると、上手く行けば体系全体を再構築する時になります。しかし早過ぎると、あなたは地球と太陽の話しか出来ません。思考したものがない話になります。そのことは重要なことです。それ故にうんざりすることなく私はそこに戻ります。それはあなたのためであり、私のためにも良いことなのです。何故なら、私たちは科学に多くを期待しているからです。世界中へ配分するのに報いるからです。もしも風習がゆっくと変わって、人々が再び余りに早く判断して、言葉どおりに取ってばかりいれば、公認の証印の元に多くの贖金を流通させているために、私は真実らしい多くの概念を聞くのでしようが決して本当ではないために、全てが簡潔でなくなるのではないのでしょうか。全く新しい銅は、黄金と見倣されたいのです。

(一九一〇年三月九日)

(1) ウィリアム・ハーシェル(1738~1822)は、英国の天文学者である。望遠鏡の製作者でもあり、天王星を

発見した（1781）。星の天文学の本当の創始者であった。

（次章へ続く）

八十一 詩人シャントクレ (CHANTECLER)

シャントクレは愚かで虚栄心が強いです。もしもこの詩人が甲高い鳴き声の雄鶏の姿に基づいて人間の虚栄心や愚かさを表したかったなら、度を過ぎただろうと私は思います。彼が無理やり信じさせようとしたかの如く私たちに示したかったのが英雄であったなら、その時は最早私はそこにいないでしょう。話をする動物に言いがかりを付けないで、語呂合わせをすることもなく、私はこれらの詩の中に人間の気高い動きや何らかの正義を探しますが、決して見付かりません。

この哀れな雄鶏に似ていると思われるような人間を想像してみてください。彼は、頭に聖遺物のようなものを付けていて、家族にとっては滑稽な暴君でしょう。自分を讃美したり、自分の働きを偉大に見せたり、自分の地位を自ら鳴り物入りで吹聴したり触れ回すためにしか口を開かないでしょう。既に、このような人間の典型はめったにおりません。自分の家庭環境の中にしか、その存在に耐えられないと言うべきです。他のどんな場所でも、彼らは放って置かれます。あるいは遠慮なく彼らの言葉は良く割愛されます。でも、彼らは得をします。もしも彼らに話をさせた儘でいたなら、私は彼らのことを恥じて赤面します。彼らは鶏小屋の中で歌うような連中なのです。

しかし、確かに私がその肖像画を描く時は、私も出来の悪い戯曲、つまり典型的な私の瘤を大きくしているのに気付きます。実際は、自分の範囲内に止まっている学者ぶる人はいませんし、次の様に言う人も決しておりません。「私は最も偉大な詩人である。私は最も奥深い思索家である。私は最も力がある視察官補である」。彼はそんなことを言いません。それと同じことを考えもしません。

演劇上の人物は、結局のところ全く偽りです。古典主義時代の大作家は既に、文体にもたれかかっていた。その他の作家たちも、人生よりも演劇の方により着目していました。彼らは生きる代わりに本を読んだのです。そこでの人間性は、醜い人を風刺するのに似ています。私が理解する限り、もしも誰かが彼だけを褒めようとしたなら、その人は直ちに平凡でおかしな人だと思われれます。しかし、私が着目し得た人々は、そのように思うことさえありませんでした。寧ろ彼らは奇妙な程臆病です。あらゆる人の人生は深く、表現のしようがありません。真の詩人は、それらの意味合いを私たちに感じさせてくれます。

恋する男は立ってポーズを取り、恋愛の場面で女性に言うだけです、「両眼を開けて下さい。英雄を良く見て下さい」。そして、そこで男性が自分自身を賞讃するに依じて、女性は感動して興奮するのを感じます。でも、それは間違いです。愚かなことです。本当のこととは思えません。イロクオイ族(1)が訳の分からないことを書くのは何のためでしょうか。おゝ、ロメオ。おゝ、ジュリエット。「それは雲雀(2)ではありません」。この単純な言葉にも震えなかった人です。ロスタン(3)の言葉にシェークスピアを連想させられると言われているではありませんか。私は、シェークスピアにおいてもシャントクレのように話が出来る人物しか理解しません。それは酔っ払いのファルスタフ(4)です。お喋り女たちは笑う病気になっています。私は全女性に訴

えます。長い台詞が終わる前に、世界中のどんなシャントクレでも構いませんが、思考する頭の中では騙されるでしょう。でも、それが正義になるのです。

(一九一〇年三月十二日)

- (1) イロクオイ族は、北アメリカのインディアン。
- (2) 「あなたは出発したいの？ まだ朝にならないわ。実際にあなたが聞いて人目を気にさせたのはナイチンゲールで、雲雀ではないわ」(シェークスピア作『ロミオとジュリエット』第三幕第五景)。
- (3) エドモン・ロスタン(一八六八～一九一八)は、詩人・劇作家で戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』が有名である。
- (4) ファルスタフは、シェークスピア作『ウィンザーの陽気な女房たち』の登場人物。

八十二 立方体の遊び (JEU DE CUBES)

見知らぬ人が、自分で考案した遊びを私に送ってくれました。木材で出来た赤や白の立方体です。各々が一センチ程です。立方体の中の溝は、金属製の平らな横棒で難なく一つの立方体にすることが出来ます。始めは思いどおりに丈夫な嵌め木の床のようなものを作り、次に直角に固めて特別な立方体になります。

この見知らぬ人は恐らく、あちらこちらで立方体や算数についての〈プロポ〉が、巧妙に立方体を結合させる発想の元になったと思っています。作品が行動の花を咲かせれば、インクは惜しくありません。

数々の考えが次から次に浮かんだ私は、本当に子供のように嵌め木で、薔薇の円形や階段を夢中で作っていました。その次には立方体の形を使って、良く分かっていましたが二センチと三センチの立方体を作ってみました。すると各々の立方体の固まりには何時も計算したのと同じ数の小さな立方体があるものでびっくりしました。三掛ける三は九です。三掛ける九は二十七です。これらは芸を仕込まれた学者犬の思考に過ぎません。私はそれを考えることもなく書いて来ました。それが本当であることを理解することもなく書いて来ました。私が、いくらそれらの言葉を見詰めて声を出して読んでも無駄です。三や九や二十七をそこに見出しません。それは覚えた歌を歌うようなものです。三掛ける九は二十六になると歌で言わなければならないなら、間違っって声を出しているのです。十二脚ではなくて十三脚の韻をもった詩とか、他の行も一緒になって韻を踏まないことに少し似ています。もしも言葉だけで考えて、二倍の立方体を推理したかったとしても、言うのは楽ではありません。辺の二倍は、二倍の容積になるのでしょうか。かくして神学者たちは考えます。彼らの言葉と照応する現実の事象は、両眼の前にはないのです。

立方体の遊びの話に戻ります。二つの立方体という言葉が意味するものを私は自分に与えます。直ぐに望んでいるのと同じ位に明瞭にそれが見えてきます。辺を二倍にすれば、容積は八倍の大きになります。これは真実であると私は考えます。私は、徐々にその他のことも考えますが、非常に複雑になってもこの赤と白の立方体という現実存在するものによって思考します。何にでも疑ってみる人々を私はそこに期待します。それは経験になります。そうして私は同じ経験をして、それが他のことになり得ないのがはっきりと分かります。

私は今、掛けるのではなくて割っています。三分の一の立方体は、二十七分の一になります。これは学校の先生が何度も言うのですが、私は子供だった時に最もショックを受けた奇妙なことのひとつでした。私は、三分の一を三分の一で、二回掛けます。増えることなく減るのです。二十七分の一でしかなくなります。勿論、木製の立方体は私の話を確かなものにしました。私は言いました、「立方体の辺を三分の一にすれば、二十七分の一にしかありません」。三歳の坊やが、これらの嵌め木で色々な形のものを作ります。階段や薔薇の円形を作ってください。この立方体の世界を良く見て下さい。至る所で法則を眼で見ることが出来ます。一条の光がそこから、あなたの生活の全てのために発しています。あなたは真理と共に遊んでいます。

(一九一〇年三月十三日)

八十三 無宗教の修道院 (MONASTÈRE LAÏQUE)

学校の休暇中に無宗教の国際的修道院のようなものを創設することを、或る哲学者が思い付いた話として私は今朝聞きました。多くの部屋、大食堂、瞑想するための共同部屋があります。散歩しながら思考する回廊、大庭園、森、視界が広々とした修道院とか城を、好きなように思い描いて下さい。そこにはイギリス人、アメリカ人、イタリア人、フランス人、ドイツ人たちが意見交換するために一週間やって来ます。自由であるのは言うまでもありません。何故なら、彼ら新入りの修道士たちは〈善意〉しか崇めないからです。

初対面の時は微笑を作ります。しかしながら、それは大変に重要なことであり、正しい考え方です。そのことに気付いて下さい。というのも自由な精神を持った人々が、正義や不正、勇気、節制あるいは理想的社会についてプラトンの本にも出てくるような素晴らしい会談を繰り返し行うために八日間も集められる場所は、世界中で何処にもないのであります。思想家たちが会う時は、殆ど一、二時間だけです。長い議論はせず、時間を決めて肝心な瞬間を逃します。この修道院では、時間は人間のものであり、時間のためにいる人間はおりません。そこでは数を万物の原理と見做すピタゴラス主義の日々になるでしょう。その思想は思考するに値するものです。そして私は多くの男性や女性と知り合いになります（それというのも女性もその修道院は受け入れているからです）。彼らは進んで十日間とか二週間の俗界を離れた生活を行って、人の話を率直に聞きます。自分が考えたことを言うためにしか話さない状態になります。

しかしながら、もしも私が修道士で、その決まりの中で八日間いたとする、沈黙の長い時間を望むでしょう。何故なら会談が長引くや否や、精神的な健康にそんなにも良いとは思わないからです。物事を思考すること、つまり話をせずに考えることは何よりも先ず極めて有益です。このような習慣によって多くの無駄話から解放されます。自尊心という棘からも解放されます。人間としての重さという観念を強くする結果になります。私は嘗て、ソルボンヌで学位論文の公開審査を見たことがあります。それは表情の訓練でしかありません。もっと良くやれると思います。一つのサークルを作るために一つだけの観念に全員が同じになること、そして大きなことを言い始めることは大変に子供っぽいと私には見えます。私は、黙って考えるという思いになり始める度に、この決心があらゆる観念を追い払っていました。もっと適切に言うなら、もしも私が人の気に入りたいと意識したならば、何も良いことは齎さないでしょう。精々、老女のようにくどくどと文句を言うだけです。そんなことを期待しない時に、まさに考えが生まれるのだと思います。精神の休息、穏やかさ、一種の半睡には、全てのものを摘みに行く眼差しがあります。そして恐らくその時に考えが生まれるのです。それが生まれた瞬間に人は目覚めます。勿論、待つことを覚えなければなりません。自問することを覚えなければなりません。私が最早如何なる考えも見付からない時は、今晚でも明日でもありませんが、まあ、そんな時は困ったことです。おゝ、有難い安逸よ。

(一九一〇年三月二四日)

八十四 聖なる木 (LE BOIS SACRÉ)

聖なる木は、不滅の感情を閉じ込めています。ミューズとか木の精ドリユアスとか森の精シルヴァヌスしか見ないことは、本の世界だけで満足しているのです。勿論、事物が意味しているものはそれ自体です。散歩者の足は大地の足音を生みます。樹木の一群が彼に同行します。眺望は刻一刻と変化します。様々なものが姿を現わしたり隠れたりしているように見えます。至る所に小径があります。眼には見えない人々が歩いた跡のようです。

この種の知覚について想像力が働かないのは不可能です。奇妙な働きです。素描は何時も知覚で完成されます。頭を回転させながら、何時も他の事物を見に行っているように思われます。この遊びはぶっきらぼうな動きを生みます。そして、それらの動きは想像力を刺激すると同時に、両肩の間に小さな恐怖を生みます。この様にして聖なる木に一編の詩が生まれます。夢は詩を完成させます。物語は夢を現実のものにします。子供たちは直ぐに、木から木へ夢を待ち伏せする神とはどういうものであるのかを知ります。

その木を一周して調べたのは誰でしょうか。森林にいる神々を追い出したのは如何なるものなのでしょう。鳥を巣から追い出す素早いものなどおりません。何故なら神も木の周りを回り、その後について行くにつれて、次第により現実のものになって行くからです。いや、そうではありません。自分の両眼を擦って、両眼の奥に事物を残す痕跡を注意して見たのは、観察者のような者です。この様にして私たちの眼は太陽によって眩惑され、紫色の小さな亡霊を事物の上の至る所で散歩させているのです。その様な観察者には、亡霊のどんなに小さな頭の動きでも、不動の事物を動かします。如何にしてダンスをさせて、回転させて、追いかけて追い越して行くのかも分かっていたのです。大変に単純なこれらの事実は、長い間、奇跡のように意味づけられて来ました。私は子供の頃に、雲が私と一緒に歩いていたのを見て、非常に恐かったことを思い出します。そして疲れた眼とか血液の働きとか脳の反響のせいで、夢にまで解釈していたのです。この様にして、何故多くの神々が至る所に続けて出てくるのかを、人間は理解していたのです。人間の肉体だけが事物と掛かり合い、陰影を与え、動かし、増やして行ったのです。私たちは今、これらの物を知っています。本当のイメージに駆けつけます。勿論、私たちは人間の歴史を理解し、神々が何処に隠されているのかを知るための歩みに従って、余りに間違ったイメージを何度も消し去ります。人間の肉体は神々の墓標なのです。

(一九一〇年三月二六日)

八十五 泉にて (A LA FONTAINE)

私は、彫刻家ロダン (1) に関する多くのものを読みました (それというのも彼は文章の中でも彫刻しているようであるからです)。そこで彼が言っていたことは、アカデミーの学校でモデルたちがとるポーズは全く間違っただけであり、その間違いは劇場や文字通りの学校や嘘っぱちの芸術学校のせいであるということです。これらの崇高な真理は最後には逃亡するのでしょうか。私はそのことを望みます。今日の芸術を支配しているアマチュア芸術家たちは皆腐っています。

私は自分が所有している庭の一隅 (2) を鋤きながら、この考えについて行きました。何故なら大地を呼吸させる時であるからです。私が書いてきた思想とは、燕の飛行のように私の労働の上に一本の線の影しか引きませんでした。私はその時、そんなことを知らなければ幸福であったのにと考えました。花壇の傍で最後に私が作ったのは、学者ぶった人が腹を立てる良い教訓でした。人は望むことも探すことも出来ないものが二つあります。それは幸福と真実です。何故なら人がそれらを少しも持っていない時には、それらのことを考えることも出来ないからです。そして持っている時には、それに没頭していて、そのことを考えることも最早分からないと大変良く考えられているからです。そして直ぐに私は、鋤を再び使い始めました。

正午の太陽で私の環境が最高に人間的調和に溢れている時になります。その時は、昼も夜もちよろちよろと流れ落ちる水を貯めた砂岩で作った大桶に、馬たちが飲みに行く時刻でした。話し声や笑い声が聞こえて来ました。小石にぶつかる鎖や轡の鋭い音も聞こえて来ました。一人の少女が馬に乗せられていて、少年たちに笑っていました。彼らに代わって私は曲がった道を、木々の梢や青い水蒸気を通して、これらのことを全部見ていました。水が落ちていました。馬は、ぶるっと荒い鼻息を立てました。人々の話し声が上がっていました。これらの音は、小鳥の鳴き声のように発せられていました。動きや色彩や音が、完璧に調和していました。これらの言葉は全てが、私にとっては小鳥たちの鳴き声でしかありませんでした。しかし言葉の明晰さは、彼岸では取るに足りないものです。恐らく、愛とはこの少女の中では事物そのもののように確かなものです。考えではなくて、事物そのもののようなものです。老化した〈世界〉は彼女の中に、あらゆる老人に代わって種子を蒔いたのです。秋に代わり、枯れ枝の積み荷に代わる、生き生きとした思い出です。疲れを知らずに歌い続ける歌なのです。巡る年であり、子供であり、子供の世紀です。全てが喜びです。当然すぎることですが、泉の周りは何時も生まれ変わって来たのです。もしもあなたが音楽家であったなら、この瞬間を手に入れることでしょうか。あゝ、音楽家は何処かのホテルの中において、ベランダで陽を浴びています。彼はピアノのペダルか何かに苦しんでいます。シギュール (3) やジークフリートのような英雄のために、泉にて女性たちによる何らかのコーラスを探します。おゝ、聖なるブリキの勲章よ。

(一九一〇年四月五日)

(1) オーギュスト・ロダン (一八四〇～一九一七) は、一九一〇年には大部分の作品を創作していた。

(2) アランは、エヌ県 (フランス北部) のベシーに家を一軒所有していた。

(3) シギュールは、スカンジナビアの神話上の英雄で、ドイツの英雄ジークフリートに対応している。

私たちは今、若者に何を望むのでしょうか。多くを語るのは難しいです。しかしながらそれは、偽善を憎むことのように私には思えます。何であろうと青春には偽善が少しもありません。

多くの子供たちには一人ひとりに長所がありますが、何事にも真実を望んでいるからです。宗教は真実か否か。人々は本当に信じているか否か、子供たちに言わなければなりません。子供たちは、嘘というものを見抜くや否や、不正行為のように傷付きます。主としてそのことから分かることは、子供たちが遊びにも全幅の信頼を寄せていることです。真実として与えられるものは、全て真実としてその儘全て受け取ります。嘘も方便という思想や、自分のためには使わずにその儘にして置く方が良い真実があるということは、子供の頭には入りません。従って、老外交官は全てを隠すか、殆ど隠したりしないで何でも公表したがる馬鹿正直な人間に話しかける時、悪口を言いません。「何てあなたは子供なんでしょう」。

歳を取ることは、嘘を吐くことでしかありません。私は、精神とか性格も歳を取ることを理解しています。嘘を吐くこととは、言葉だけの意味で真実でないことを言うことではありません。信頼している人を裏切ることなのです。というのも虚構や、美しく完成された演劇や、空想上の事例は、話をするためだけの嘘ではないからです。他人の信頼がなければ、礼儀も又ありません。それ故にこう言って良ければ、本当の嘘は、それを信じるようになる人々に対して、それ自体を信じないと主張することにあります。それを聞く人々が真実を期待すればする程、信頼を表すようになり、嘘は卑しくなります。そしてその様な理由から、若者は年長者たちの嘘を拒絶し軽蔑します。

嘘の上に築かれた君主制教育というものがあります。多くの人々が次の様に言ったり、聞いたりすることがあります。「私は彼らが信仰を持っているなら、その信仰を私の子供たちに与えたいし、彼らが幻想を持っているなら、その幻想を子供たちにも与えたいと思う」。彼らがそのことを、政治的教義の前文として敢えて言ったなら、名前を登録するのでしょうか。「国民というものは全てを支配し得ない」。

ところで注目すべきことは、その様な箴言が一般的に広まると、理解される如何なる機会もなくなるということです。その時大声で叫ばなければ、若い人ではありません。「もしも何かの間違ってれば、間違いであると言いなさい。もしも疑わしいことがあれば、疑わしいと言いなさい。そして、あなたが間違いであるとか、疑わしいと思う理由を詳しく言いなさい」。これらの箴言が君主制的若者とかカトリック的若者には少しも尊敬すべきことにならず、解放されている若者にしか素晴らしいものになりません。王党派たちは一人の王にお願いをしますし、それらの証拠も求めます。シヨン運動家たちは、真摯で自由な議論を望みます。要するに、若者というものは自由です。そして〈共和制〉が至る所にしみ込んでいるのです。〈君主制〉の中にも、〈教会〉の中にもしみ込んでいるのです。

(一九一〇年四月十六日)

次の話は歴史家たちが喜ぶ逸話です。大変に学識があつて、福音なら何でも直ぐに批判していた人が語ったことです。彼が長時間の仕事をしていて休息するために美しい湖畔を散歩していた時、今まで思つてもいなかった歴史評論家の授業のようなものに出会いました。湖岸の一方にいた彼は、猫に草を食べさせようとしていた少年を観察しました。誰もが記憶の中に掛かっている一寸した絵画です。何時間後になると、対岸にも猫に何かを食べさせようとしていたもう一人の少年を見ました。その少年が食べさせようとしていたのはカタツムリでした。二人の少年の行為は、主な点では似ていますが、一点で相違しており関係がありませんでした。偶然は多くのことを生みます。しかし歴史家にとっては一条の閃光でした。彼は自問します、「もしも私がこの種の別々の二人の語り手によって生まれた二つの話を、記録文書で見つけたなら、二つの物語のうち一方は他方を写したものであると躊躇せずに結論を下すことは疑いの余地がない」。

私は如何にして歴史が書かれるのかを自問します。図書館の鼠が最近、私に語ってくれたことは、恐らくヴィクトル・ユゴーも頁を捲った〈絵入り雑誌〉双書が眼の前にあったとのことです。時代と転居記録から、そのことは本当のように思えました。ところで我が読書家の鼠は、この選集の中に「世紀の伝説」という素晴らしい物語を見付けました。彼は次のように躊躇せずに結論を下しました。「ヴィクトル・ユゴーが歴史を教わったのはこれだ」。それはあり得ることです。でも、私には何も分かりません。ヴィクトル・ユゴーがこれらの雑誌の頁を開かなかつたということもあり得ます。歴史家の論理は、符号や本当らしいことを整えて把握します。しかし最も本当らしいことが、何時も最も本当のことではないのです。

十年以上会っていなかった中学校時代の友人二人と市内電車の中で出会った時、彼らはその偶然の結果に驚嘆しています。裁判官の眼で見るとすれば、そのような出会いは少なくとも二人のうち一人が仕組んだように見えますが、その仮説はどんなにか告発制度と結びついていたことでしょうか。その告発が偶然を引き合いに出したとしても、それを聞く人はおりません。しかしながら人生とは、偶然で出来た織物でしかありません。市内電車に乗っている人々は今日見ただけで、決して二度と見ないのでしょいか。腰掛けに座っている一日限りの人々の集団を私と共に作っている偶然は、決して二度と見ないのでしょいか。いや、私は彼らと会つたことがなかつたのでしょいか。このことは何も明白に説明出来ません。私は、彼らと会っているかもしれませんし、会っていないかもしれません。しかしそれは最早ありそうもない出会いです。私たちは計画して仕組まない限り、もっと少なくなるでしょいか。

我は、あなたが西洋双六で遊んでいると仮定します。上がるためには、七が出なければなりません。骰子が振られ、落とされ、何回か回転してから一面を上にして停止します。まあ、三と四とか、五と二とか、六と一とか、まさにあなたが期待する数が最後に出るとしても、毎回は法則がありません。思いどおりに行かずに、小さな災難のように思えませんか。そしてあなたが期待している数は何時出るのでしょいか。でも、その時は来ます。大変に良く出る時もあります。しかし歴史家は私を嘲笑します。何故なら私は、歴史を書いているのではなくて、西洋双六で遊ん

でいるからです。

(一九一〇年四月十八日)

八十八 握手 (LA POIGNÉE DE MAIN)

良い代議士を見付けることはそんなにも難しくありません。取分け立候補者のポスターに捕らわれず、当選者に多くを望まないことが習慣になれば難しくありません。しかし私たちは恐らく、統治者たちに不足しています。何故なら私たちは最早、統治するために命令したり世論を無視しようとする冷淡な野心家を、昔から望んでいないからです。その上、統治者たちに報いようと最早歓声を上げることもありません。王宮や王に対する喜びや、王への出費にも歓声を上げません。私たちは最早それを求めているのです。

ところが大臣になった代議士はそこにおります。彼が感じているのは如何なる困惑でしょうか。その困惑が齎すその二つの職務の葛藤を良く観察して下さい。代議士としての彼は、何時も政府の一寸した敵です。彼は、友人でもある有権者と一緒に敬意もなく大臣たちのことを話します。優しい言葉もなく、びしびしと大臣たちに質問します。大臣とは権力を悪用する人間である、という考えが彼には何時もあります。大臣がリスクもなく悪用出来るようになると彼は、国民の擁護者として、小役人や小市民の根っからの弁護人になります。大臣になれば、省庁へ如何なる態度で入れれば良いか、が以上で分かります。国民の意志を最後には省庁へ届けるように入るので。しかし、大臣は彼自身です。そこでの彼の役割は二つあります。彼はどちらかを選ぶのでしょうか。民衆扇動家になるのでしょうか。ローマ皇帝になるのでしょうか。

全て簡単に支配するよう出来る党が一つあります。上院議員であれば容易です。もしも下院議員であったなら、多くのリスクを伴います。もしも議院内で真の代議士であったなら、電話によって裏で管理することは決して甘受しません。演説はありません。喝采もありません。友人として何時もやるように、両手を広げて国民の処へ行きます。

ところで国民は、統治者に優しくありません。自分が理解するようになるや否や、言い過ぎる程言って来ました。団結の固い友人たちのグループを見付ける沢山の集会で、昔のことや原理原則しか話さないで少し様子を見ている人間が、一方を導いて他方を黙らせるようになるのを国民は知るようになります。それはローマ皇帝にとっては、かなりの大成功を生みます。しかし冠の無い善き皇帝は敵へ真っ直ぐに進みます。気立てが良く率直に議論します。掌や拳がそうであるように、余りに粗野な国民の本当の声を理解する人になります。

国民の味方になる人々は、この経験を皆持っていました。英知のある行商人の如く、或る時は此方、或る時は彼方で行われる民衆大学へ行きなさい。公開するための商品を並べなさい。高級な口上を言いなさい。長く話して、議論は余りしないで下さい。そうして取分け旅役者のように、一回だけの公演にしまさい。国民は素直で、感激し易く、寛大で、善良であるとあなたは理解するでしょう。逆に、同じ田畑では長く働きなさい。単純になって仲良くなり、芝居じみた効果は無しにしまさい。その時人々は、道具を使うようにあなたに荒っぽい好意を持ちます。礼儀正しくはありません。屢々何か反動的なウイルスが付きまとう優れた人々が多くいるのも事実ですが、彼らは握手に期待していなかったということです。

(一九一〇年四月十九日)

八十九 予審判事たち (JUGES D'INSTRUCTION)

予審判事たちは、自分たちの仕事を分かっていません。先日、告訴されている医者が、近頃ニースへ旅行したことを否定しました。予審判事は、それと反対のことを証明しようとして切符を彼に見せました。被告人は、古い外套から見付かったそれらの切符が四年前の日付けであると反論しています。そして難なく証明されています。この判事は反論するためなら、何でも見付けます。「あなたの弁護のやり方がその点について上手く行ったのは、大変に幸運でした。しかし、他の証拠を調査しましょう」。もしも彼が公正であったなら、次のように言ったことでしょうか。「確証もなく旅行したと断定したことを私は謝罪します。そして同じ間違いをもう犯さないように気を付けます」。しかし判事の中で、そのように考える人はいるのでしょうか。ですから思い切って言えるのですが、その様に考える判事は例外です。非常に珍しいことです。予審判事たちは、自分たちの仕事を分かっていません。

さあ、その切符を手にとって、私なりにはっきりさせてみようと思います。もしも私が真実を見付けるならば、可能な限りあらゆる方法で証明しようとしなければなりません。先ず切符が発行された日付けを見なければなりません。この種の調査を求めるのが被告であると考えたとゾツとします。もしも被告に記憶が無かったなら、啞然としたでしょう。でもそれで判事は満足するのでしょうか。

今度は別のことを見てみます。医者の方が、犯罪の容疑者と一緒に、犯行当日か翌日に旅行をした一旅行者であったことは重要です。しかし私たちは少しも重要と思っていない。容疑者は否定しているのです。きちんと比較すること、つまり実際に証人の記憶を試すことが重要です。ところで平均的知能を持った人間は、直ぐに慎重な方法を想像します。先ず証人は、写真に写っているのは容疑者だと認めていましたので、その容疑者に少し似ている写真の何枚かを証人に見せることが非常に重要です。その中から、色々なポーズの容疑者の写真を何枚か示すことになるでしょう。証人が言っていることが十分に正しいと理解されることになるでしょう。

その人間のアリバイの時も同じ方法が採られます。容疑者と殆ど同じものを着て、そっくりな複数の人間を用意します。一方は多く、もう一方は少なくして下さい。そして証人に「その日、あなたが旅行をした人は彼らの中の誰ですか」と言いなさい。更に、もっとはっきりとした証拠を見せなさい。これらの人々の中に容疑者を入れずに証人に見せて、容疑者がいるかどうか尋ねなさい。

私は、この様なことを老判事に言うと、彼は答えました、「私たちの仕事を分かっていないのはアラン、あなたです。何故ならあなたは私たちが証拠を探しているからです。その時、私たちが求めているのは自白です。被告は自分に罪があるなら認めるに違いありません。そうでなければ、首を刎ねることはありません。証人は、私たちの疑問を解くためにいるのではありません。被告に罪があるかどうかを彼に分からせ、人に見られたということが彼にその証拠を見せることになるからです。被告を見たと言う証人も、間違えることは良くあり得ることで、それでも犯人が知っていることと一致するものを見せれば、最後には自白するのです。困

難は、その方法を白日の下に出来ないことです。何故ならもしも私が、有罪とするその決定的な唯一の証拠は彼しか知らないと仮定したなら、被告は最早自白しないからです。その結果、教育という手の込んだ遊びには、私たちにあるものよりも絶えずもっと確かな証拠があるように振る舞うのです。戦略とは、無罪の人には力を発揮しませんが、罪を犯した人にはギロチンへ導きます」。「そして、事態をもっと都合良くするために、罪の無い人々を徒刑場へ送っているのです」と私は彼に言いました。

(一九一〇年四月二一日)

九十 比例代表制と〈多数派〉 (LA R. P. ET LA "MAJORITÉ")

私は昨日、比例代表制に有利になるように町の壁に書かれた文章を読みました。それが言いたかったのは簡潔で分かり易い文ですが、非常に奇妙でした。「あなたは百人の市民に対して、四九人は何も重要ではなくて、五一人が重要であって欲しいのでしょうか」。私は、次のように何かに応えたいと思います、「比例代表制では、小選挙区単記投票でも同様ですが、最終的には最多数の意見に従うのを良しとしなければなりません。例えば百人の代議士が選挙されれば、現在の制度では五一人いれば大臣になり、四九人ではなれません。五一人が法律を制定しなければならなくなり、四九人は従います。彼らが代表しているのは、彼らと有権者です。従って、その文章は簡潔であり明白です。驚かそうとしている文になっていますが、全てはこれから行われる選挙改革後に良くなるのでしょう」。

もしも、人がその文章に何か重みを持たせたかったなら、言えるのは次のことです。「四九人に対して五一人の有権者が一人の代議士を選んだ時に、四年間の全てが決まって仕舞います。しかし、四九人の代議士に対して五一人の代議士が一人の大臣を支持した時、その大臣が殆ど勝利しようとしていた政敵たちに少しも妥協しなかったなら、長く支持を得られなくなるでしょう。従って、議会での少人数も推して知るべしで、選挙区での少人数よりももっと力を持っています。ですから比例代表制という制度はその意味において、反対政党の利益にもなるのです。最大多数による暴政を抑制します」。

要旨は以上の様なものです。しかし私にはそれでも大変に抽象的であると思われました。事実として、もしも代議士が僅かな票で当選したなら、僅かな票でも大臣から転落しないで済んだことにもなるのと同じ考えのように思われます。その代議士は、もっと強い地位を手に入れるために、競争相手の何らかの意見にも譲歩します。もっと適切に言うなら、例え実際に彼への投票に数えられなくても、彼に投票しなかった人々の意見も考えから除けなくなります。何故なら、結局のところ彼に投票した人々が如何なる人か何時も良く分からないからです。彼は、自分の選挙区を全て聴診します。各々の質問について、市民たちはそのために新しいやり方で一団になります。もしもパン屋たちが苦情を言うとか、ペンキ屋たちとか、綿業者たちが苦情を言わなければならないなら、最早、不満はすっかりと政治的色彩を帯びなくなります。要するにその代議士は、自分の選挙区では党派間の仲裁者のようになり、議会の大臣のようです。あらゆることが上手く行きます。そして五一人が四九人のために法律を制定することは、選挙ポスターに書いてあっても、そういうことは決してありません。それは紙に書かれたインクでしかありません。

(一九一〇年四月二二日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ III

【2014年4月号】

<http://p.booklog.jp/book/83032>

著者：アラン （翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83032>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83032>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ